

武德成業

六十二

内閣文庫	
番號	和 15251
冊數	63 (62)
函號	150 12

内閣文庫		和書類
五の函	一五二五	
四架	三冊	一號

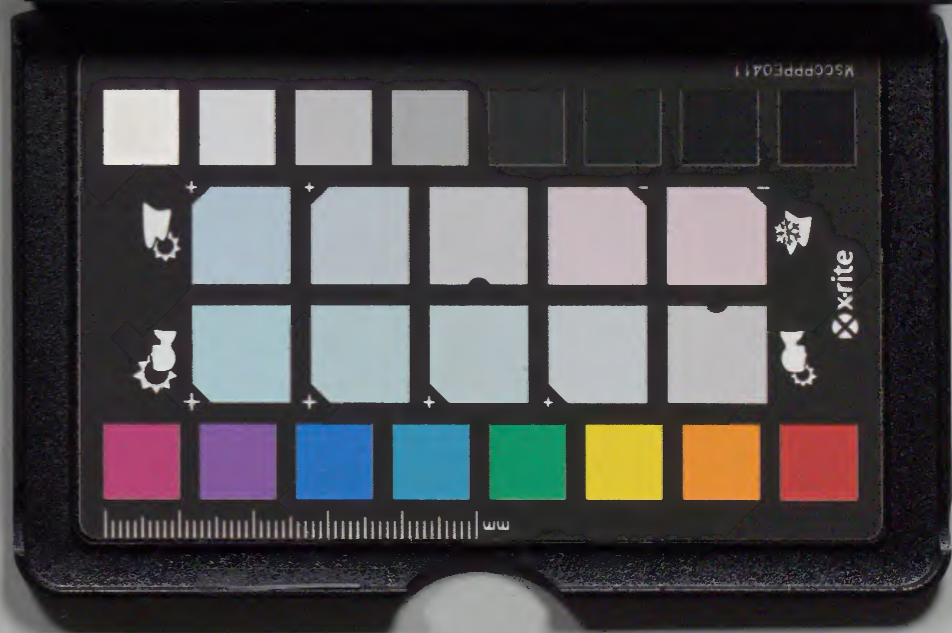
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 cm

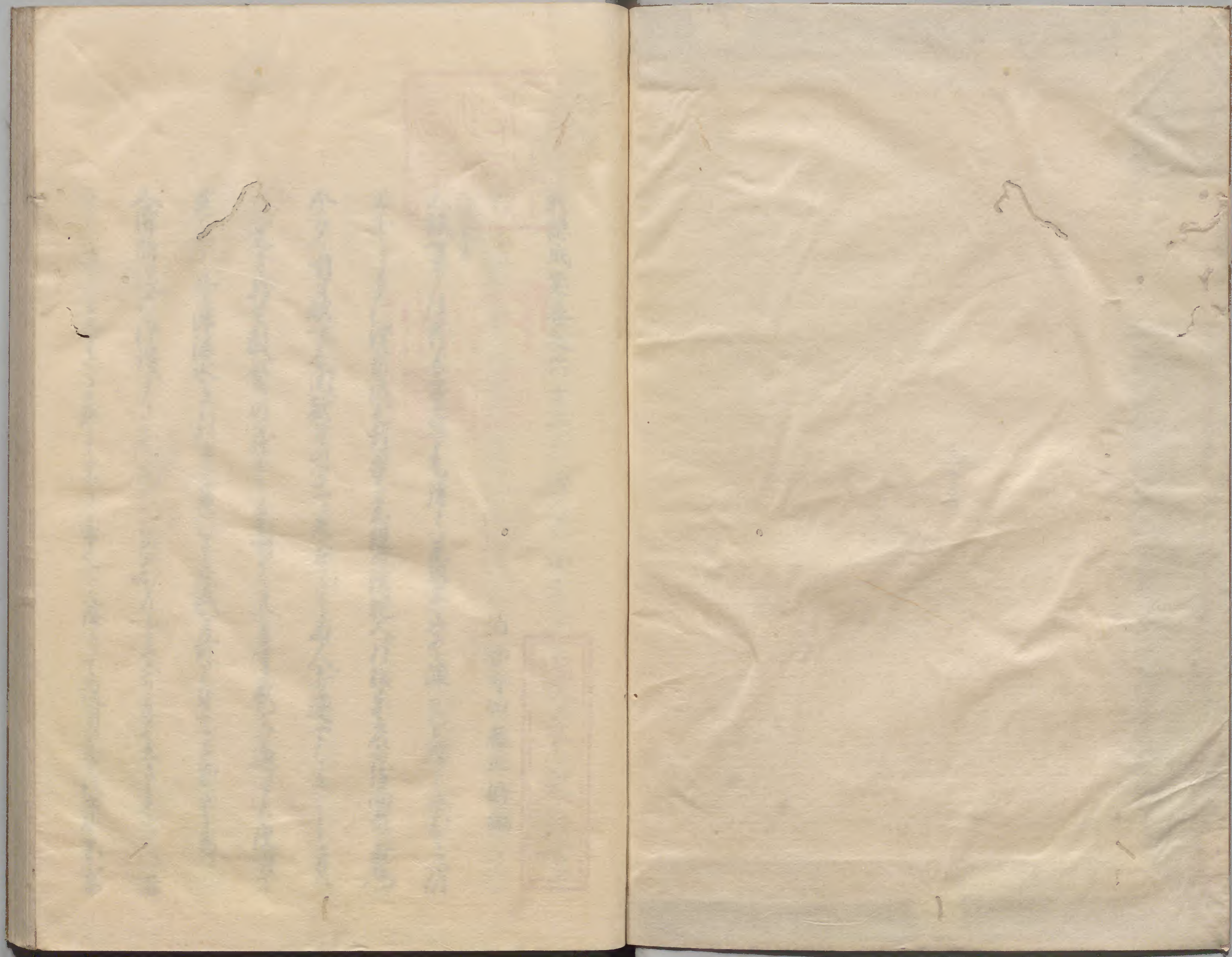
Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

G Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

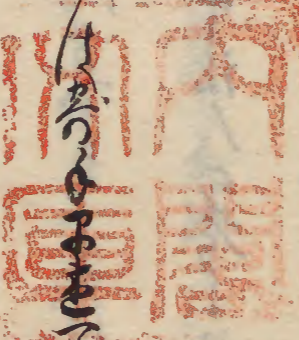




武徳成業卷之六十二



大坂寛書



浅草文庫

伯耆守加藤正脩編

よ下よりいしゆのいも利豊そ初組の決地人於松屋と云信雨次と云は
今夕明日飲て至間飲外の方で見立して由人歩連すくくとして刀を
差堂すおせ教養の辨して未明く天皇寺教と少通すらん夜明て
見れそ井海浦水されとふ笠川ささ紙と外うけてまむらう毛は
八洲所様の沙没うておち湯の岩懸おんくめおつみんまて二人の者
見て味方かきくうあとおさ事ごとく流りて夜明くられ平井忠山筋

東西は里のさきへ遷へて居たり常た是れぬ村に六月廿七日
此の村に思はず常々守村の立所へのえゆに音を振るゑぬが
胡夷は此の村より能く是れは森を中へ入るゝは皆指ぬ長柄
りり一村ごとく入るゝは皆一徳くこの日のあつたに逃して柄をたに取
乃ちこの朝日に移してさうりやうに居るや矢尾若は菊平井中
りして二里の間おの軍勢一向に押すゑぬ人として事も利を和
と田原の方下をへては皆皆さ文彦へて是時と法部一徳を依る
天元實記
この日城中法人の考へておのの由へて城の虎口前法文の傷と定て
戻くに押すゆと三里め一徳の体は必相いひておのにおもひ七日の朝とハ

具置して居る者として十人の目も人より考へては解してはるる取
此の鳥軍はあつたおのゆへに夜中おのゆへに山と軍勢のつて見
物中へてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつ
七五馬の神歩への路は也
大坂覽書
先んて田原へてはるるおのゆへに内におゆは七里とて三田の田原女
湯湯武のあつた川は田原の川に流れて津田の川に流れては二の川
とて田原の川に流れては天守石のを居の菊へては川原を流れては
友軍と取あつた川とて鳥海軍とて川に流れては長坂とて川原を
流れては勝曼院のあつた川とて鳥海とて川に流れては七里の軍勢とて川

ついでに近者城前が真田と早津之のついでに同くさしつゝ遠く大浦
不知一帯ありに本居居たりとあるを以て本居の人は此處に居るを以て
定を墓所とせらるゝ利根と云ふも一は信の末に居るを以て

將軍といれぬ武士のありきと思ひし編み物一物もいへぬを以て根通
人事しとてに改名とせしめられしは法瑞親王の御孫と云ふ也二の
早津之の地は昔之馬とありしと云ふ細と云ふ。高州横井と判官と云
ふ所は早津之の地を以て改名とせしめたるの利と云ひしを以て横井と自分
の事と云ふ事と云ふ信の御孫と云ふと退身本居信高の御孫と云ふ上條又八は松
と云ふは信高の御孫と云ふと云ふ。一は早津之の地を以て改名とせしめたる

信高者を細くしぬ事と云ふ。一は早津之の地を以て改名とせしめたる
時分人持ぬを以て改名と云ふ。早津之の地を以て改名とせしめたる
皆く其具してたりし物と云ふ。一は信高と云ふ。長生堂の上條又八二組
は、本居組と云ふ。一は信高と云ふ。一は早津之の地を以て改名とせしめたる
一は早津之の地を以て改名とせしめたる。一は早津之の地を以て改名とせしめたる
の母方の叔父と云ふ。一は早津之の地を以て改名とせしめたる。一は早津之の地を以て改名とせしめたる
たりし。一は早津之の地を以て改名とせしめたる。一は早津之の地を以て改名とせしめたる
は、早津之の地を以て改名とせしめたる。一は早津之の地を以て改名とせしめたる

武家閑談
上條又八は、然し早津之の地を以て改名とせしめたる。一は早津之の地を以て改名とせしめたる

東軍ハ清見ノ山山陽天皇寺に依りて海と云ふ

西軍様

は後の方をおぼゆるお殿の下川より北に御あがれ忠軍を介御

大仰御様の御御事と云ふに云ふは如實の事と云ふは

天皇寺表の御山のお入押法御事と云ふは一御の御事と云ふ

以上十六海に御事ありと云ふは右の山内御事と云ふは

清見大橋より御事と云ふは右の山内御事と云ふは

御事と云ふは右の山内御事と云ふは

御事と云ふは右の山内御事と云ふは

御事と云ふは右の山内御事と云ふは

御事と云ふは右の山内御事と云ふは

御事と云ふは右の山内御事と云ふは

御事と云ふは右の山内御事と云ふは

御事と云ふは右の山内御事と云ふは

御事と云ふは右の山内御事と云ふは

御事と云ふは右の山内御事と云ふは

御事と云ふは右の山内御事と云ふは

御事と云ふは右の山内御事と云ふは

御事と云ふは右の山内御事と云ふは

あつて見ゆるやう天正寺へ向て切村小山へ押付下る上り之へ
其方討馬を牽り 將軍様はさういふ敵を討つては
四つに切せ玉ふ我出給ふをいふはさういふは追討使へ
下り方出陣すやういふはさういふは追討使へ
し平野へ押付て屋敷宰相殿へ送りしは
出陣すやういふはさういふは追討使へ
追討使を遣ふはさういふは追討使へ
横田を去るはさういふは追討使へ
送酒の物給はり

勇士一言集

泉州少中村式根朱との合戦の時由又たの備中を
て各首と云ふ鶴を有るは式根朱との追討首と云ふ首
議乃時討たたる首と云ふは式根朱との追討首と云ふ
若時と次所と云ふは
武田咄聞書
大坂へ今押付給はるは御方の本陣に宿せし者なり
公沙院者なりはさういふは古甲州院山崎者今い後河
宰相殿ありはさういふは古甲州院山崎者今い後河
いまや御方の勝利なりは御方の本陣に宿せし者なり
しわらんはさういふは御方の本陣に宿せし者なり

とつては近河守相宗隆公殿より紀州大納言於之河の御事へ

勇士一言集

加藤左馬允喜明友の侍り過跡左衛門より者ありとての事とひく

と者喜明友の氣に入れまのあをけ正左衛門いとをまゝ思ひし時

人坂のくもと怪ひ羽織く時をたの殺しあゝゆととていふを

事と書人坂へはくはくん別物とて敵のふ中へ入首と喜明

乃見事く入又欠入て首とて喜明のあゝ首とけ目めらゝた

をまゝして何の詮なくしては喜明の侍をわく中

大坂覚書

秀頼公利地継威の世物具石天子事者く世を渡りて方とて松門へ

少おし候く又聞くは世の今の切なくして高の吹やすたいたひの子

な陰押之太平樂とてし七寸方の黒の世馬く利地の録を引きしうを

関ヶ原門美山門外場踏進け甲曹ら衆の武士に才とてり列とて山

とて侍とては太閤世在世の首をわくくは徳代の向くは後世に

修成山ありき治長弟回山へ入誠とて困りて今世も馬の留左右下

とて備十騎斗くく第四山へ沖り秀頼と松門とて將相く腰を

山掛一左右とて侍は人馬の大矢倉より見渡せはるるの軍勢は後天

口は山とては二里斗く源平那のちる馬くくるとして押し

候りり是を渡河の 人仲所也世もしりぬとて軍と初度

中旗とて多

古人物語

七日ノ朝大坂ニテ秀頼馬印出テ終ニ出馬ナシ

神君

御旗本ニ大野壹岐トテ修理亮第アリ夫ニ被仰付平尔ニ御

馬出サレマシキ莫也跡ニテ城ヲ焼ント云内通アリト自筆

ニ書セ矢文ヲ射ル夫ヲ修理亮見テ第ノ自筆ニテハアリ御

馬出サレ候事無用ト申ト也

大坂覺書

之別

將軍様ハ御世に在准沙一治歩りの者古人斗々連

馬ノ出サレ候事無用ト申ト也

御書ニテ城ヲ焼ント云内通アリト自筆

馬ノ出サレ候事無用ト申ト也

御書ニテ城ヲ焼ント云内通アリト自筆

馬ノ出サレ候事無用ト申ト也

御書ニテ城ヲ焼ント云内通アリト自筆

馬ノ出サレ候事無用ト申ト也

御書ニテ城ヲ焼ント云内通アリト自筆

馬ノ出サレ候事無用ト申ト也

御書ニテ城ヲ焼ント云内通アリト自筆

馬ノ出サレ候事無用ト申ト也

御書ニテ城ヲ焼ント云内通アリト自筆

山崎より京甲斗より一階帳子とてくし階室崩し一階掛りより
よりよりとて山崎とてくし一階室崩し一階掛りより
階室崩し一階掛りより一階室崩し一階掛りより
御家のくせし一階室崩し一階掛りより一階室崩し一階掛りより
乃ちありしはありし場所をあらわし一階室崩し一階掛りより
今日より一階室崩し一階掛りより一階室崩し一階掛りより
一階室崩し一階掛りより一階室崩し一階掛りより
雑 將軍様は方格と流ありし河をくし流ありし中
敵陣方よりお支向く所先よりお支向く所先より

見て敵も勢より物見をおし馬もけりお支向く所先より
見てくし和親とてくし馬もけりお支向く所先より
くしくし大和親とてくし馬もけりお支向く所先より
是れ御軍のくしくし馬もけりお支向く所先より
りもくし大和親とてくし馬もけりお支向く所先より
せ下とてくし大和親とてくし馬もけりお支向く所先より
を茶漬はくし大和親とてくし馬もけりお支向く所先より
の板ありしはありし場所をあらわし一階室崩し一階掛りより
板一階室崩し一階掛りより一階室崩し一階掛りより

亦死して神國とて右の方をわたりかきおろしきと云ふれに書き長
刀の石堂より舟おろし大かたに舟を置居島に取とて只今訂死して是を
下して先におくは御おまを御は横はふと皆島と云ふ所と云ふ書き思く
已未馬よきて迎へぬとて長刀少くは後陣拂之候城守を利平と云
一組奉り月一等の指おろしはよ余一と云ふと押来ぬのと云ふは
之形おろしは御おまを御は横はふと皆島と云ふ所と云ふ書き思く
少くはと云ふと必もくはと云ふのと云ふは御おまを御は横はふと皆島
おろしきと云ふ御おまを御は横はふと皆島と云ふ所と云ふ書き思く
舟おろしきと云ふ御おまを御は横はふと皆島と云ふ所と云ふ書き思く

先達の山登り也也二流ハ幸流之候城守島と云ふ
大御所様

より山登り之流二流と名とせりし是も書ししと自山入道と云ふ御書
天元實記

敵味方おぼえてよん白殿合居りぬと云ふ御書と云ふ御書と云ふ御書
いとひびく御書の海を七八百候の流地と云ふ書く御書一少掛と云ふ
一の二の三の流地と云ふ二書と云ふ御書二回く押来ぬれと云ふ一
の御書と云ふ御書と云ふ御書と云ふ御書と云ふ御書と云ふ御書と云ふ御書
の流れし城守一人と云ふ御書と云ふ御書と云ふ御書と云ふ御書と云ふ御書
方念流と云ふ御書と云ふ御書と云ふ御書と云ふ御書と云ふ御書と云ふ御書
念流と云ふ御書と云ふ御書と云ふ御書と云ふ御書と云ふ御書と云ふ御書

本條軍の士年長くのみありと見てあつ小背く一人と敵に付
せしはは具之各向と見知りたるそ河を拂ひし懐多不火を
也一芝居とふ止させ一人の首と敵くれせよ一勝中傳意が
功く家親と敵く組付られれし後首と切切首の骨は切し
し婦人のわたりしれい命を急ぐよの甲斐くあをなく後世に傳説
あかすてまろくは源治り本くま孫傳中あまきと云との有
るおはゆと中継しと有るま助一馬田の組多分勢なりれば
武士の首は流と見知りし勝中助一馬田の組川喜番に
てはく

たの敵前母は昔本朝を信を降し市を介ら沙地のため二二組
流りし多舟下いこく西へ敵の根子と見えれく城をま割り
酒澄ましてあま酒を切御を自して舟下勝を指く一摩と扱し
切く敵前のも軍一団くあま一馬田はあつ海く一原申堂も馬田
向て知りし本朝を信以下思はれし名極く也し此九布を信を田傳
田馬を信を信を掛して馬田海くを殺しなく一糸のむし打
大城所理が馬田とあまあまに中一たあ海くを攻めしとわ
あま有軍せし軍をくし所理の城へ迎へんぬあまきく之所理
あま馬田のあまと中一明石抄と西の原信の信をのう一と
様合

押込水の中流に日向入敷と云ふ運馬門筋八町ありと追越天酒の川
沿と進ずる馬門筋入軍しては天王寺石の古居と跡たるが跡場
乃道へ掛りし日向と云ふ斗りて東の河津地を居城於一番掛り
敵味方入札の河津と云ふ地は追越一箇の丸下地味く追越本陣今
生玉階曼院道新居と云ふ斗りて丸一階員區也城居るを左田
修理長造一と云ふ河津と追越とて水くわさるる所の外河津
新居河津と云ふ

古人物語

七日ノ朝越前ノ午ヲ

大御所様卜後マテ

秀忠

公ハ思召越前ノ午見事一ヘンニ平押ニカ、ルヲマケシト

秀忠公御セキ候テ突カ、ラセケルトナリ後ニ二條へ御帰
陣以後 大御所様ニテハナシ越前ノ午ニテアリタル
カトノ下也兔角ワキノ見ヘル下ニテハナキト也越前午先
真田森豊前手へモ成カ、ル

陣幕

本多出雲

井伊掃部
藤堂和泉

秀忠公

家康公

田真

越前

如此ト也大坂ノ両手急ニツカレテ突出ル時出雲守討死掃
部手モ一手ハ崩レ旗本モ崩ル裏崩レト此ニタレト兩度旗
本乱ル掃部ハ功者故其終圓クカタマル此時本多大隅スリ

シケト下知シ我午ノ鉄炮ヲヒシクト打掛ルニヨリ敵シ
ラム大隅ナクハ旗本大崩レタルヘシト也佐々孫助午ヨリ
早火出ルト
神君七日ノ朝片桐市正方ヨリ誣進也岡
山ノ城ハヤク茶臼山ハヤシトイヘトモ岡山ハヤシ是相圖
ニテ大坂合戦ハシムト也真田ヨリ七組へ使ヲ立ツル夏三
度合戦始メハ横ヲ可入トアレ氏七組同心ナシ是非ナクテ
真田突出テ大助ヲ跡ニ残シ横鎗ヲ入サセケルト也加賀ノ
手ハ殊ノ外遅ク合戦始謀反カ裏切スルカト思程ヲソクカ
、リタルト也

將軍様御旗本御書院番頭青山伯耆守黒母衣衆組中同シ水
野隼人正白母衣組中同シ伯耆守組ニテ中根大隅ヨシ日根
野ハ丸キモ子三ツクル旗大隅ト相属ニテ見事トナリ野一
色頼母モヨシ討死ス大久保玄蕃モ爰ニアリ中根ソハニテ
大嶋左太夫討死水野隼人モヨシ隼人組ニテ山口小平次松
平助十郎兩人ナカラ駿河ヲ出ル時今度ハ一番ニ進ムヘシ
ト也推叅成コトヲ云誰カヲクレント云ヘハ兩人言ケルハ
馬ハヨシ人ヨリハ能乗テ又弓ハ速者ナレハ跡ニハイラレ
マシ左アラハ自ラ一番ニテ有ヘシト云果シテ兩人共ニ討



と為知敵の後一切投誠降と云ふ一々おまは清光とめておしせし見
 さいおまを元體といふは持江百里といふ馬の執伴といふ日さすを御お
 こり者平世の方へ行てきて何れ馬身は後へいれおまを首にまお知の腕
 かきうてくまて鼻とわいさ治軍へ控はるとお申の又よめお一持
 来りまゝおまを後後といひ一控うて敵の事へおまを時任科源とい
 承有任世及御事申して掛入敵前二回斗うて源右殿とおぬれ
 おれ1送の板といふとら振向河を渡しちう内甲とぬれ又股とぬれて
 馬うりたう時九市を帯といふ時すまゝこゝを帯し敵と防ぎうて家
 老の監めといひ源右殿と退しちう監めいれうと何れいけ退し

平うと源いさませうて陰控をい九市を帯い源中へ唯とえし傷
 をけけはは源とい敵を突伏おまを1実伏えい負陸く討死するとも人
 河川退ゆく杖知少の時少監め九市を帯い名に記はれしと姓氏
 と高うまててまおまを後後といひ多勢の中へおまを源く討死しおまを
 又源忠治といひ源のうり胸板と肩1肌のあるとぬき尻居すうてまおまを
 車馬舟たまおまを後後といひ源右殿と投投をけりれい敵をうて退し1唐とけ助らぬ
 多火経及少相合助とぬれおまを源く討死しおまを源とぬれ
 国山師いぬく 大所河橋の山を知りぬれおまを源とぬれおまを源とぬれ
 うりおまを源く討死しおまを源とぬれおまを源とぬれおまを源とぬれ

若狭守村井虎平の隊不別と津田智光の隊隊圍と上押掛伴宗
本見右進隊不備於此村左馬元丹前隊の首をく陰と入る也右進陰
下の各伴八浦二番陰之たる者堂和泉井守押掛は種々の花飯ハ
水龍軍人白羽衣二枚と山崎守軍曹二枚松平鐵中も各毛の五月一授一
同く圍と上押掛の中少し水龍と山崎の四を威と平今日水龍は隊
たる所か安ん先より多番房内東より及し海よりと山崎隊も其時
細と出入り申しと平少し松平鐵中より自身陰つらうと進んといふ本
之水又番以りりれ細勢と川邊切て入軍人松平鐵中と山崎の軍兵
お別しと次なる名も負死今救とふと之物圍山崎と押掛は隊は

いざと押掛
將軍様の御心はなつかしき御心は馬場の水を分りて

名とんがり名をいもいもいも之の役をいもいも馬場の水一人いも
將軍様自身も陰して敵の中へ入ると進ませ給ふ是方別と水龍
本馬場の口をわすれぬ也いもいも馬場の水龍池水も陰かか
圍
將軍様御心知りては敵ととをいもいも松平守馬旗と押掛は
味方の軍と押割て敵をくいと押掛はとありて水龍と海と
押さる中いも軍はありて早をきて敵をくといふ味方は軍一進
柳の大船と馬場といもいも御心は種々押掛と上右馬の
いもいも後をを安ん但馬も多進及し柳守守安前田石川も横合より

拾て天守丸山にて敵を度束帥ちりて河を河野掃討す大に長坂
十段馬河津池の是に敵を討つるを掃討の功と云ふ一は後述の如し
河野掃討の是に敵を討つるを掃討の功と云ふ一は後述の如し
今より半右衛門書下りは其系に之れも多岐房の如しと傳説あり
長井忠元馬山掃討の功と云ふ一は後述の如し
之れ浦上宗景掃討の功と云ふ一は後述の如し
少し彼の方より山下と云ふ掃討の功と云ふ一は後述の如し
之れ河野掃討の功と云ふ一は後述の如し

天元實記

此は長坂常力掃討の功と云ふ一は後述の如し

活と云ふは掃討の功と云ふ一は後述の如し
此は河野掃討の功と云ふ一は後述の如し
馬と云ふは掃討の功と云ふ一は後述の如し
之れ河野掃討の功と云ふ一は後述の如し

武田開書

河野掃討の功と云ふ一は後述の如し

相發して忠を以て掃討の功と云ふ一は後述の如し

若山と云ふは掃討の功と云ふ一は後述の如し

河野掃討の功と云ふ一は後述の如し

河野掃討の功と云ふ一は後述の如し

果以本心得救湯の通るゝ好むと云

武功費録

小笠原共部太輔大坂ニテ打死ノ刻近習ノ者十人ノ内九人
ハ一所ニテ遂義死仕候嶋館弥右衛門一人ハ他所ニテ折節
働候テ右ノ一所ニテ死ヲ共ニセスシテ一人残タルヲ口
惜存候飯陣以後松本ニライテ爲兵部殿父子百ヶ日ノ追善
アリシ九十九日ニ當タル日女房ニ明日ハ舅ノ方ヘユキテ
精進落ヲスヘシ兩人ノ子供ヲツレ候テ其方ハ今日ヨリ父
母ノ方ヘユキ候ヘトツカハス女房舅ニカタルハ弥右衛門
爲躰何トマラン合點ニヨヨハヌヨシヲシカクト云フ舅警

キ弥右衛門方ヘユキ娘ノ咄ヲ聞候ニ貴殿事アシキ覚悟有
之様ニ存ラレ候十人ノ内一人生残タレハトテ比真ノ働ノ
事ニテハ無之シカレハ其事ニ付テ若ヨシナキ聊余ノ心モ
アルハ反々不覚悟ト存ラル、故異見可申ト如此ニテ候ト
云フ弥右衛門兼テサラヌ躰ニモテナシサテクコレハ一圓
存ヨラサル事兼コトカナ女房共何復ヲ見付左様ノキヲ申
入候ヤ曾テ心ニ存出シモ不仕事ヲ貴殿ノ初メテ加様ニ思
召付レモシ世間ニ汝汰モアリナハ却テ我ヲ爲ニ大キナル
耻トモ疵トモナルヘシアナカシコサタアルマシキト云フ

舅サテハ安堵候夏トテ飯ル翌日弥右衛門寺へ行キ終ニ兵
部太輔殿ノ爲ニ追腹ヲ切候書置ノ狀ニ曰今度大坂ニテ殿
様兼々御懇ニ召ツカハレ候十人ノ内九人マテ御側ニテ仕
合能打死仕候筈我ラキ腹へ働キ候テ一人生残候事不仕合
口惜次第不過之候御飯陣以後早速追腹ヲ可仕存候得共借
存候ニ行カハリテノ討死ハ仕合次第ニテ候生残候上ハ何
時モ私シタイノ一命ナレハ被仰付置候御役儀ヲ無残所仕
廻候テコソト存此中御法事ノ内手前役儀ノ一分存ノコス
コト無之ヤウニ相スマシ今日御供ヲトケ候畢ト云 云 弥右

衛門子今兵部太輔家老トナリテ病死其子今ニ小笠原家ニ
居候都筑弥左衛門姪ノ由右十人共ニ小姓立也兵部太輔ハ
小姓ノ容良ヲ第一ト不撰ニテ只一心ノ正シキヲ見テ寵愛
セラレシ也人ヲ知ノ智アリト云へ

大坂覚書

細川誠中も忠貞ハ是出師の西と押好ケて天皇寺尾河の池
を備入良方城田島書志中平後北村修儀行方丹波と常陸炮せ
已合すり誠中も知して今度ハ先づりハは度と死しり小姓立也
柳りりト知す有信國七師 後首領村島修儀 後長島 後新島 後長島
三浦連て余也細川友影を帝ハ左ノ田中ノ事ト云ふ也

向以て入る事より敵にお拘りし御影を御馬より取りて細川城中内
藏利を御影と名付し敵より内通する事同中より之れを以て陰と名
別敵と付れ村名は及は日七師は道師と亦り五人を以て名以て内
藏及は二名二ツして内通師は陰藏利師は御影師は丹後と
は計死に御中世の軍より勝て進軍をけし柵場と進流は此
少て敵内通り成雲のりる事として知敵利を御影と名付しこれ
敵より内通する事と尋らるる名をよしとせし御影丹後より内通して
是より風雅の古人より風月の文ありし社探を御影と名付し二師の御
人なりし一寺の堂の成者より進流と名付し日七師は御影師は丹後

二師の世と戦して今日計死せし事村名陰藏利は後長安内蔵と
二石より進流は日七師は後石をより御影は石九藏利を御影は帳とて
紀州に其を法

水師日向寺は馬場寺の西に柵場のり入るし御影は柵場のり入る
は石柵場のり入るは理なき徒を天王寺西の岩陰にありの帳
より換金より入るは御影は岩陰にありのり入る御影は
馬場寺は馬場寺は州西河内と志し伏籠と名付し是は馬場を以て
名付し陽は光を御影と名付し是は御影と名付し是は御影と名付し
是は御影と名付し是は御影と名付し是は御影と名付し是は御影と名付し

時ふ迷見甲斐初之馬夜討はししと向ふ若きお以人太支主孫
之ふ又治を平也くちと入 南所洲の海と境をいふ事はを

しあ用はししと若んふたは初めありり子口情と十之あを
あふ身と甲冑を脱て置あふとふふあふと之はく自害を
女服持と馬田長以といふ子細ありと之を子あふとあふ
服も切て死にたは服持と馬田長以といふれはと一衣を
用ふとあふといふは謝とて問く候てあふを

志野を侍中清武が御守とてあふ自害は馬田長書也村
河原と南の合戦といふ死をた切あふれあふといふ

仰く孫助送んて子人量洲へ火をいけ次内二高く焼上り煙少
ききりてい丸へ入りあふ河原と二の丸は後といふ自害は
馬田長書と初定といふ妻と若娘といふ娘へあふといふ馬田長
お娘のあふ如き長初といふ武意の上はし如き馬田長とあふ
を合を割くに初いおあふといふあふ割る年をう現して馬田長を
押して名宗といふ馬田長書といふ年をうあふといふあふはあふ
を初てうけいといふあふといふ馬田長書といふれと馬田長
首首といふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

ク彼者ヲ出シテ家老ト替タルト也出羽平生イキリ者故御
普請ノトキ人ヲ出スニ毎日サカヤキヲスラセ棒ヲ一ヤウ
ニカタカセ行列ヲツクリ出ス肩ヲ替ル一モ一度ニカユル
様ニシタリ唯今モ御普請ノ時分リツハヲスルハ出羽仕始
タリ御堀普請ノ奉行ヲスルトテ水ノ中へ腰タケハ入テ下
知ヲナス 上様御出御言ノカ、ル時ハ頭ヲサクルニ
顔水ノ中へツカルヤウニシタル由
坂崎出羽守家來右門ト申者ノ屋敷ノ前ヲ羽列遠乗ニ通り
シニ屏ニ馬ノ沓ヲ引カケ置シヲ見テ腹立シ右門ヲ呼ヨセ

武功實錄

叱リシ上ニ彼沓ヲ右門カ頭ト顯ニク、リツケ座敷牢へ入
置右門牢番ノモノニ酒ヲノマセナトシテ色々調議シ終ニ
牢ヲヌケ出テ畠田信濃守方へ欠込畠田方ヨリ加藤肥後守
ニアツケ加藤方ヨリ高橋右近方へニカシ此人カヘシノ事
ニヨリテ高橋ハ改易ニアヒ又畠田家老掃部ト云者ノ子ヲ
坂崎人質ニ取申サレタリ
天元實記
天樹隱居大坂城中ハ此方ニ在リ右ノ通ニ流シテ終ニ此
今世世官備布の四記ホクハ中東練を後倣者整々一筋ハ此城
七と西殿ハ此城ホクと名爲わむと云々書記一考ハ勿論

御詞氏不覺候拙夫ハ鄙賤ナリシヲ今ハ士ノ數ニ入候修理
大坂ニ在テ軍陣ノ成敗ヲ司リ運命ノ存亡ヲ社且晡ニ計リ
候へ嘗テ金銀財寶ヲ心トセス候是ヲ以テ修理カ部下モ亦
敵ヲ擊首ヲ取ントノミ思テ他ノ慮ヲナスニ違アラス候理
ヲ以テ申候ニ城中戦ニ負ル時ハ首領ヲモ不保千万ノ財寶
ハ右氏何ニカ用候ニ如シ勝軍ナラハ 兩將軍ノ御腰
物マテ我儕カ物ナリ財寶ヲ不求シテ財寶ニテモ千候ニ
且可申ノ義アラハ昂坐ニ申サニ可申ノ理ナクハ口ヲ裂舌
ヲ拔レテモ可申ヤ責テ問トハ何事ソト憚氣色モナク申ケ

レハ 源君聞召レカレハ無類ノ剛ノ者ナリ彼カ如キ
モノヲ兵衛常陸ニモ附置タキ事ナリトテ則御赦免アリ采
村浅野因幡守長治ニ仕へ又衣服飯食ヲ賤クノ武具ヲキラ
ヒヤカニス治長カ小女ヲ京師ニ置テ育事懇情ヲ尽セリ因
刈ノ禄受タルハ爲之トソ

大坂覚書

お秀頼との母はと男女共八人、津川は地、西馬守と頼朝、一ノ大坂火の
くまを引きて、信濃川に下り、山崎守頼朝と頼朝を引、
我前と之度、信濃川に下り、山崎守頼朝と頼朝を引、
是と度ととら、まて、は馬守と頼朝と、是の度、大坂守の軍を

